「ヤングケアラー」への支援について

倉敷市・新田中１年　池田　透子

クラスに二人。この数字は中学生の約十七人に一人がヤングケアラーであるという事実からの計算である。

私は、この記事でヤングケアラーという言葉を初めて知った。「ヤングケアラー」＝障害や病気の家族に代わり家事を担ったり、幼いきょうだいの世話をする人。私は、この記事を読んで二つの大きな驚きに直面した。

まず一つ目は、ヤングケアラーが費やす世話などの時間の長さである。私と同じ中学生が一日に平均四時間もの時間を費やしているという。テレビを観たり、ゲームをしたりしたいだろう。友達とも遊びたいだろう。色んな心の声が私には聞こえてくるようだった。

二つ目に驚いたこと。それは、ヤングケアラーが相談できる環境が整っていないという事実だ。中学生、高校生が一家の家事を担うには重すぎると思う。何と心細いことかとも感じる。もし、私がヤングケアラーだったら、なかなか周りの人に相談することができないだろう。だから、信頼できる人が近くで気軽に相談できる窓口が増えていって欲しい。加えて、ヤングケアラーの多さからみても、ヤングケアラー専門の機関もできて欲しいと考える。私にできることは何だろう。もし、身近にそういったヤングケアラーの友人がいたら、寄り添い、話を聞き、近くの信頼できる大人への相談を手助けしたいと思った。そのためには、身近な福祉施設などの相談機関を自分で調べてみようとも思った。

「時は金なり」という言葉があるが、中学や高校の時は、人生の中でも、二度と経験することができない、何にも代え難いのではないかと思う。そんな時を少しでも、心が安まり将来に目を向けることができ、何かに打ち込める時間のすき間をヤングケアラーに与えてあげて欲しいと心から思った。今は、核家族も多く、コロナウイルスも流行っているため、長期間にはおよばないかもしれないが、自分も家族のために時間を多く費やすことが起こるかもしれないだろう。そんな時は、勇気をもって、周りの人に相談したり、助けを求めたりしたいと思う。その行動は、自分の助けにもなり、同じような思いをしている人たちの勇気と助けになったら良いと感じる。

想像力持って寄り添う

ヤングケアラーの支援

成蹊大・渋谷教授

家族の世話を担う18歳未満の子ども「ヤングケアラー」について、国は初めて行った調査で中学生の約17人に1人、高校生の約24人に1人が該当するとして支援に動き始めた。当事者の体験や海外の事例を研究する成蹊大の渋谷智子教授は「子どもが1人でもがくのは非常につらい。周囲は想像力を持って寄り添うことが必要」と指摘する。

成蹊大の渋谷智子教授。「ヤングケアラーの中には、自分のことをどう話せばいいか分からない子もいる。丁寧に話を聞く人が社会に増えてほしい」

しぶや・ともこ　成蹊大文学部教授。専門は社会学。ロンドン大や東大院で学び、両国でヤングケアラー研究に取り組む。著書に「ヤングケアラー」「コーダの世界」。編著に元当事者が書き下ろした体験談をまとめた「ヤングケアラー　わたしの語り」。

ヤングケアラーは、年齢や成長に見合わない責任を負っている。国の調査では1日の世話に費やす平均は中学生が4時間、高校生は3・8時間。子どもにとってどういう時間か想像してほしい。

同世代は部活や遊び、進学といった普通の生活を過ごす。そんな中、ヤングケアラーは子どもらしい時間を味わうのが難しい。しんどさを理解されないのはつらい経験だ。一方、心情は一人一人違う。同情されたくない、親が悪く思われるから話したくない、学校では普通の子でいたい、やりがいがあるなど多様だ。

必要なのは、子どもの話を丁寧に聞くこと。話しやすい環境だ。話を十分聞かずに助言したり価値観を押し付けたりしないよう、子どもの考えを聞く姿勢が大切だ。

ただ、子どもが行動を起こすのは大変で、声を上げるのが厳しいこともある。子どもの背景を想像しながら寄り添ってほしい。例えば、忘れ物や遅刻をしがちだったり、部活に参加できなかったりする生徒は、ケアに懸命なのかもしれない。責めたり、ただ頑張れと言ったりせず「何か事情があるのかも」と想像するだけで接し方は変わる。

そのためにも学校全体でヤングケアラーについて学ぶ意味はある。自分が当事者だと気付かず「なぜ自分だけ」と悩む生徒の助けにもなる。さらに学校を起点に、福祉の専門家や地域ボランティアが連携すれば、子どもが信頼できる人間関係、居場所につなげられる。

世界に先駆けて1980年代末から支援に取り組んだ英国では当初、ケアを受ける親を責める風潮も見られた。日本でも、当事者家族の関係を「世話する側、される側」と単純に見ないよう注意したい。家族の状況や過ごす時間はそれぞれ異なる。英国ではその後、ヤングケアラーの集いや家族支援の取り組みが進んでいる。親を追い詰めるのではなく、子どもが介護力とされる状態を改善し、家族全体をどう支援するかを考えてほしい。

ヤングケアラーは複雑な感情に悩む。責任感の半面、面倒に思うのも当然だ。自分を責めなくてよいし、どんな気持ちを抱いても大丈夫だと伝えたい。そして、子どもが自分の考えや状況を整理するには周囲の手助けがいる。声掛けや必要な情報につなぐなど、できることがある。子どもの声に耳を傾けられる社会が求められている。（敬）

障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている

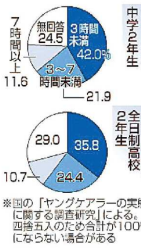
家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている

© 一般社団法人日本ケアラー連盟 / Illustration : Izumi Shiga

日本ケアラー連盟の「こんな人がヤングケアラーです。」より抜粋

子どもの心情　丁寧に話聞く社会を

家族の世話をする中高生が平日、ケアに費やす時間



※国の「ヤングケアラーの実態に関する調査研究」による。四捨五入のため合計が100%にならない場合がある

60%以上相談経験なし　厚労省と文科省、初の調査

「見ようとしないと見えない存在、見ようとしても見えにくい存在」とされるヤングケアラー。日本ケアラー連盟によると、幼いきょうだいの世話、障害や持病のある家族の介助や看病、日本語が話せない家族や障害のある家族の通訳など、ケアは多岐にわたる。

厚生労働省と文部科学省が4月に公表した初の実態調査では、「世話をしている家族がいる」と答えた中学生は5.7%、高校生は4.1%で、クラスに1～2人いる計算。60%以上は相談した経験がなかった。

世話をする頻度は半数弱が「ほぼ毎日」と回答。「ヤングケアラーという言葉を聞いたことがない」は全体の80%超に上った。認知度が低く子どもや周囲の大人が気付きにくいのも課題だ。

両省のプロジェクトチームがまとめた報告書は、早期発見のため、学校や福祉関係者、子ども食堂など民間支援者への周知や、現状把握のため地方自治体に実態調査を促す。ひとり親や高齢、障害、生活困窮など家庭状況に応じた支援につなげ、会員制交流サイト（SNS）を活用した相談体制なども求めた。

2021年７月９日付　山陽新聞

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。